

餓鬼



この記事は **検証可能な参考文献や出典** が全く示されていないか、不十分です。

出典を追加して記事の信頼性向上にご協力ください。（2017年10月）

餓鬼（がき、梵: preta、巴: peta、音写: 薛荔多〈へいれいた〉）とは、**仏教**の世界観である**六道**において餓鬼道（餓鬼の世界）に生まれた者^{[1][2]}。原語の preta はかつては死者の**霊**を指したが、仏教において**輪廻転生**の生存形態である六道に組み込まれた^[2]。preta は鬼とも訳される^[3]。



餓鬼



旧河本家本『紙本著色餓鬼草紙』第3段「食糞餓鬼図」/平安京域内（洛中）の小路で排便する人間達（庶民）と、人間の糞便を食いたくてたむろしている食糞餓鬼が描かれている。「餓鬼草紙」項に詳説あり。

目次

概説

餓鬼の住処

正法念処経

餓鬼の種類

阿毘達磨順正理論

正法念処経

餓鬼への供養

民間信仰における餓鬼

俗語の転用

脚注

註釈

出典

参考文献

関連項目

概説

餓鬼は、三途・五趣（**五道**）・六趣（**六道**）の一つ^[3]。餓鬼は常に**飢え**と**乾き**に苦しみ^[3]、食物、また飲物でさえも手に取ると火に変わってしまうので、決して満たされることがないとされる。ただし、**天部**と同じように福楽を受ける種類もいるとされる^[3]。

餓鬼の住処

餓鬼の本住所は、**閻魔王**が主である**閻魔王界**である^[3]。

正法念処経

「正法念処経」巻16によれば、餓鬼の住処はつある。

1. 人中の餓鬼。この餓鬼はその業因によって行くべき道の故に、これを餓鬼道（界）という。夜に起きて昼に寝るといった、人間と正反対の行動をとる。
2. 薛荔多（餓鬼）世界^{注釈 1)}の餓鬼。閻浮提の下、500由旬にあり、長さ広さは36000由旬といわれる。しかして人間で最初に死んだとされる閻魔王（えんまおう）は、劫初に冥土の道を開き、その世界を閻魔王界といい、餓鬼の本住所とし、あるいは餓鬼所住の世界の意で、薛荔多世界といい、閻魔をその主とする。余の餓鬼、惡道眷属として、その数は無量で惡業は甚だ多い。

餓鬼の種類

無威徳鬼と有威徳鬼の2種類があり、無威徳鬼は飢渴に苦しめられるが、有威徳鬼は天部と同じく多くの福楽を受ける³⁾。

阿毘達磨順正理論

「阿毘達磨順正理論」³¹⁾は、3種×3種で計9種の餓鬼がいると説く。少財餓鬼と多財餓鬼の2つを有財餓鬼ともいう³⁾。

1. 無財餓鬼 - 食べることが全くできないもの³⁾。飲食しようとするも炎などになり、常に貪欲に飢えている。唯一、施餓鬼供養されたものだけは食することができるといわれる。
2. 少財餓鬼 - 膿、血などを食べるもの³⁾。ごく僅かな飲食だけができる餓鬼。人間の糞尿や嘔吐物、屍など、不浄なものを飲食することができるといわれる。
3. 多財餓鬼 - 人の残した物や、人から施されたものを食べることができるもの³⁾。天のような享楽を受ける者もこれに含む³⁾。多くの飲食ができる餓鬼。天部にも行くことができるものは富裕餓鬼ともいう。ただし、どんなに贅沢できても満ち足りることはないといわれる。

「一に無財鬼、二に少財鬼、三に多財鬼なり。この三（種）にまた各々三（種）あり。無財鬼の三は、一に炬口鬼、二に鍼口鬼、三に臭口鬼なり。少財鬼の三は、一に鍼毛鬼（その毛は針の如く以て自ら制し他を刺すなり）、二に臭毛鬼、三に癭鬼なり。多財鬼の三は、一に希祠鬼（常に社祠の中にありその食物を希うなり）、二に希棄鬼（常に人の棄つるを希うて之を食すなり）、三に大勢鬼（大勢大福、天の如きなり）」

正法念処経

「正法念処経」では36種類の餓鬼がいると説かれている。

1. 鑊身（かくしん）、私利私欲で動物を殺し、少しも悔いなかった者になる。眼と口がなく、身体は人間の二倍ほど大きい。手足が非常に細く、常に火の中で焼かれている。
2. 針口（しんこう）、貪欲や物惜しみの心から、布施をすることもなく、困っている人に衣食を施すこともなく、佛法を信じることもなかった者になる。口は針穴の如くであるが腹は大山のように膨れている。食べたものが炎になって吹き出す。蚊や蜂などの毒虫にたかられ、常に火で焼かれている。
3. 食吐（じきと）、自らは美食を楽しみながら、子や配偶者などには与えなかった者になる。荒野に住み、食べても必ず吐いてしまう、または獄卒などに無理矢理吐かされる。身長が半由旬もある。
4. 食糞（じきふん）、僧に対して不浄の食べ物を与えたものになる。糞尿の池で蛆虫や糞尿を飲食するが、それすら満足に手に入らず苦しむ。次に転生してもほとんど人間には転生できない。
5. 無食（むじき）、自分の権力を笠に着て、善人を牢につないで餓死させ、少しも悔いなかった者になる。全身が飢渴の火に包まれて、どんなものも飲食できない。池や川に近づくと一瞬で干上がる、または鬼たちが見張っていて近づけない。
6. 食気（じっけ）、自分だけご馳走を食べ、妻子には匂いしか嗅がせなかった者になる。供物の香気だけを食することができる。
7. 食法（じきほう）、名声や金儲けのために、人々を悪に走らせるような間違った説法を行った者になる。飲食の代わりに説法を食べる。身体は大きく、体色は黒く、長い爪を持つ。人の入らぬ険しい土地で、悪虫にたかられ、いつも泣いている。
8. 食水（じきすい）、水で薄めた酒を売った者、酒に蛾やミズを混ぜて無知な人を感わした者になる。水を求めても飲めない。水に入って上がってきた人から滴り落ちるしずく、または亡き父母に子が供えた水のわずかな部分だ

けを飲める。

9. 恚望（きもう）、貪欲や嫉妬から善人をねたみ、彼らが苦勞して手に入れた物を詐術的な手段で奪い取った者になる。亡き父母のために供養されたものしか食せない。顔はしわだらけで黒く、手足はぼろぼろ、頭髪が顔を覆っている。苦しみながら前世を悔いて泣き、「施すことがなければ報いもない」と叫びながら走り回る。
10. 食唾（じきた）、僧侶や出家者に、不浄な食物を清浄だと偽って施した者になる。人が吐いた唾しか食べられない。
11. 食鬘（じきばん）、仏や族長などの華鬘（花で作った装身具）を盗み出して自らを飾った者になる。華鬘のみを食べる。
12. 食血（じきけつ）、肉食を好んで殺生し、妻子には分け与えなかった者になる。生物から出た血だけを食われる。
13. 食肉（じきにく）、重さをごまかして肉を売った者になる。肉だけを食われる。四辻や繁華街に出現する。
14. 食香烟（じきかえん）、質の悪い香を販売した者になる。供えられた香の香りだけを食われる。
15. 疾行（しっこう）、僧の身で遊興に浸り、病者に与えるべき飲食物を自分で喰ってしまった者になる。墓地を荒らし屍を食べる。疫病などで大量の死者が出た場所に、一瞬で駆けつける。
16. 伺便（しべん）、人々を騙して財産を奪ったり、村や町を襲撃、略奪した者になる。人が排便したものを食し、その人の気力を奪う。体中の毛穴から発する炎で焼かれている。
17. 地下（じげ）、悪事で他人の財産を手に入れた上、人を縛って暗黒の牢獄に閉じ込めた者になる。暗黒の闇である地下に住み、鬼たちから責め苦を受ける。
18. 神通（じんつう）、他人から騙し取った財産を、悪い友人に分け与えたものになる。涸渇した他の餓鬼に嫉妬され囲まれる。神通力を持ち、苦痛を受けることがないが、他の餓鬼の苦痛の表情をいつまでも見ていなければならない。
19. 熾燃（しねん）、城郭を破壊、人民を殺害、財産を奪い、権力者に取り入って勢力を得た者になる。身体から燃える火に苦しみ、人里や山林を走り回る。
20. 伺嬰兒便（しえいじべん）、自分の幼子を殺され、来世で夜叉となって他人の子を殺して復讐しようと考えた女になる。生まれただけの赤ん坊の命を奪う。
21. 欲食（よくじき）、美しく着飾って売買した者になる。人間の遊び場に行き惑わし食物を盗む。身体が小さく、さらに何にでも化けられる。
22. 住海渚（じゅうかいしょ）、荒野を旅して病苦に苦しむ行商人を騙し、品物を僅かの値段で買い取った者になる。人間界の1000倍も暑い海（ただし水は枯れ果てている）の中洲に住む。朝露を飲んで飢えをしのごう。
23. 執杖（しつじょう）、権力者に取り入って、その権力を笠に著て悪行を行った者になる。閻魔王の使い走り、ただ風だけを食べる。頭髪は乱れ、上唇と耳は垂れ、声が大き。
24. 食小児（じきしょうに）、邪悪な呪術で病人をたぶらかした者が、等活地獄の苦しみを得た後で転生する。生まれただけの赤ん坊を食べる。
25. 食人精氣（じきにんしょうき）、戦場などで、必ず味方になると友人を騙して見殺しにした者になる。人の精気を食べる。常に刀の雨に襲われている。10年～20年に一度、釈迦、説法、修法者（仏・法・僧）の三宝を敬わない人間の精気を奪うことができる。
26. 羅刹（らせつ）、生き物を殺して大宴会を催し、少しの飲食を高価で販売した者になる。四つ辻で人を襲い、狂気に落としきれ殺害して食べる。
27. 火爐焼食（かろしょうじき）、善人の友を遠ざけ、僧の食事を勝手に食った者になる。燃え盛る炉心の中で残飯を食べる。
28. 住不浄巷陌（じゅうふじょうこうはく）、修行者に不浄の食事を与えた者になる。不浄な場所に住み、嘔吐物などを喰う。
29. 食風（じきふう）、僧や貧しい人々に施しをすと言っておきながら、実際に彼らがやってくると何もせず、寒風の中で震えるままにしておいた者になる。風だけを食べる。
30. 食火炭（じきかたん）、監獄の監視人で、人々に責め苦を与え、食べ物を奪い、空腹のため泥土を喰うような境遇に追いやった者になる。死体を火葬する火を食べる。一度この餓鬼になった者は、次に人間に転生しても必ず辺境に生まれ、味のある物は喰うことができない。
31. 食毒（じきどく）、毒殺して財産を奪ったものになる。険しい山脈や氷山に住み、毒に囲まれ、夏は毒漬けと天から火が降り注ぎ、冬には氷漬けと刀の雨が降る。
32. 曠野（こうや）、旅行者の水飲み場であった湖や池を壊し、旅行者を苦しめた上に財物を奪った者になる。猛暑の中、水を求めて野原を走り回る。
33. 住塚間食熱灰土（じゅうちようかんじきねつかいど）、仏に供えられた花を盗んで売った者になる。屍を焼いた熱い灰や土を食べる。月に一度ぐらいしか食べられない。飢えと渴き・重い鉄の首かせ・獄卒に刀や杖で打たれる三つの罰を受ける。

34. 樹中住（じゅちゅうじゅう）、他人が育てた樹木を勝手に伐採して財産を得たものになる。樹木の中に閉じ込められ、蟻や虫にかじられる。木の根元に捨てられた食物しか喰えない。
35. 四交道（しきょうどう）、旅人の食料を奪い、荒野で飢え渴かせた者になる。四つ角に住み、そこに祀られる食べ物だけを食われる。鋸で縦横に切られ、平らに引き延ばされて苦しむ。
36. 殺身（さつしん）、人に媚びへつらって悪事を働いたり、邪法を正法のごとく説いたり、僧の修行を妨害した者になる。熱い鉄を飲まされて大きな苦痛を受ける。餓鬼道の業が尽きると地獄道に転生する。

餓鬼への供養



この節は検証可能な参考文献や出典が全く示されていないか、不十分です。出典を追加して記事の信頼性向上にご協力ください。（2017年10月）

餓鬼への供養として施餓鬼法がある。食物に『救拔焰口陀羅尼經』に説かれる陀羅尼によって加持すると餓鬼の苦を取り除くとされる。一般的には盂蘭盆供養の一つとして行われるところから盆行事と混同されているが、施餓鬼法自体は本来は特定の月日の行事ではなく、僧院等では毎夜行われることもある。

民間信仰における餓鬼

仏教の布教とともに餓鬼が市井に広まると、餓鬼は餓鬼道へ落ちた亡者を指す仏教上の言葉としてではなく、飢えや行き倒れで死亡した人間の死霊、怨念を指す民間信仰上の言葉として用いられることが多くなった。こうした霊は憑き物となり、人間に取り憑いて飢餓をもたらすといい、これを餓鬼憑きという^[4]。

俗語の転用

子供は貪るように食べることがあるため、その蔑称・俗称として**餓鬼**（ガキ）が比喩的に広く用いられる^[5]。餓鬼大将・悪餓鬼など。

脚注

註釈

- ↑ サンスクリット語 preta-loka

出典

- ↑ 「餓鬼」 - ブリタニカ国際大百科事典小項目事典 (<https://kotobank.jp/word/%E9%A4%93%E9%AC%BC-43451>)
- ↑ ^{*a*}^{*b*} 「餓鬼」 - 日本大百科全書(ニッポニカ) (<https://kotobank.jp/word/%E9%A4%93%E9%AC%BC-43451#E6.97.A5.E6.9C.AC.E5.A4.A7.E7.99.BE.E7.A7.91.E5.85.A8.E6.9B.B8.28.E3.83.8B.E3.83.83.E3.83.9D.E3.83.8B.E3.82.AB.:9>)
- ↑ ^{*a*}^{*b*}^{*c*}^{*d*}^{*e*}^{*f*}^{*g*}^{*h*}^{*i*}^{*j*}^{*k*} 総合仏教大辞典1988, p. 177.
- ↑ 村上健司編著『妖怪事典』毎日新聞社、2000年、97-98頁。ISBN 978-4-620-31428-0
- ↑ 「餓鬼」 - 大辞林 第三版 (<https://kotobank.jp/word/%E9%A4%93%E9%AC%BC-43451#E5.A4.A7.E8.BE.9E.E6.9.E97.20.E7.AC.AC.E4.B8.89.E7.89.88>)

参考文献

- 総合仏教大辞典編集委員会（編）『総合仏教大辞典』法蔵館、1988年1月。

関連項目

- 業

- [因果](#)
- [供養](#)
- [飢餓](#)
- [施餓鬼 - 施餓鬼会、施餓鬼供養](#)
- [餓鬼の首 - 8月15日の翌日](#)

「<https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=餓鬼&oldid=67831485>」から取得

最終更新 2018年3月23日 (金) 09:29 (日時は個人設定で未設定ならばUTC)。

テキストは[クリエイティブ・コモンズ表示-継承ライセンス](#)の下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は[利用規約](#)を参照してください。